

東大社研プロジェクトでシンポ

「釜石には希望ある」

釜石市を調査地に「希望学プロジェクト」に取り組む東大社会科学研究所が主催して、「釜石に希望はあるか」をテーマにしたシンポジウムが3日、同市内で開かれた。鉄の街として「繁栄と衰退」を経験した人々に、研究者たちは「希望を持つことが大切」とメッセージを送った。



「釜石に希望はあるか」をテーマに語り合った＝釜石市で

参加者

「多くの資源があることと実感」

「釜石には希望がある。地域の誇りや志といったものを、みんなが持つことが大事だ」

プロジェクトリーダーの玄田有史・同所助教は語った。

鉄の街として栄えた釜石市。89年に高炉の火が消えると、9万人を超えた人口は急減し、現在約4万3千人。鉄に代わる

基幹産業がなかなか見つからず、産業振興や市街地活性化が課題だ。

そんな釜石で希望はどのような意味を持つのか

――。同研究所は昨年9月に本調査を実施し、学者ら約30人が市民にインタビューなどをした。中間報告としてシンポジウムを開催した。

まず、同研究所が「釜

石は中核企業の縮小後、地域のネットワーク形成がうまくできていない。希望の再生に何が必要か、考えたい」と調査の概要を説明した。

「衰退から再生へ」製造業に着目して」と題し報告した中村圭介教授は、「この10年で釜石は鉄の街ではなくなり、構造転換が起こった」と指摘。「ここには整備されたインフラと良質な労働力がある。どうネットワークをつくるかが課題だ」と話した。

グリーンツーリズムをテーマにした大堀研・同所研究機関研究員は、「釜石は工業と自然がある。明確な都市イメージを打ち出すことが、希望につながる」と述べた。

さらに、経済活性化については、橋川武郎教授が「釜石にはストーリー

が必要」と提言した。三陸沿岸と釜石線の二つの観光ルートがあるとし、「いまはバラバラになっているものが一つになれば、未来は開けてくる」とした。

その後、討論があり、参加者からは「マイナスに感じていたものが、外からは新しく見えることがわかった」「釜石には多くの資源があることが実感できた」といった感想が聞かれた。

調査に協力した市内の民宿・宝来館の岩崎昭子さんは「希望学ということとで、最初はバカにされていると思ったが、みんなが一つの旗の下に集まる雰囲気が出て良かった」と話していた。

同所では、今後も釜石での調査を続け、07年度に成果を報告書にまとめるといふ。